

HKFA Technical Report 2020

2020年度 第99回全国高校サッカー選手権大会北海道大会 決勝

日時

2020年10月25日（日）

会場

札幌厚別公園陸上競技場

1 大会の概要と主催者へのインタビュー

今大会はコロナウィルス感染症の拡大の影響でインターハイが中止され、全国大会出場をかけた初めての戦いとなった。JFA U-18サッカープリンスリーグで全勝と、好調を維持している旭川実業と今大会で一戦一戦チーム力を高めてきている札幌大谷の対戦は、緊張感のある接戦となった。
＜2種委員長 荒 忍氏＞

今大会のトーナメント全体を振り返ると、コロナウィルスの関係で練習自体が2月から5月までできなかった影響がかなり感じられる。リーグ戦でも後半になって足がつる選手を多く見かけたので、選手のコンディションは例年とは違う。また、個人としてだけではなくチームとしても成熟していない印象。

大会を運営する中で気をつけた点は、飲水タイムがゲームを左右する可能性があるので、本来なら開始20分後が望ましいが、審判の方にもなるべくスローインではなくゴールキックのときに飲水タイムを取るなど、タイミングに気をつけて試合を捌いてくれている。

決勝に残った2チームについて、旭川実業は、プリンスリーグでの調子が良く、コンサドーレと並び北海道の頂点といってもいいレベルである。選手権では全国で勝ことを目標にしているチームであり、トータル的に長けているので、持ち味を発揮できれば、頂点を取れるのではないかと。

対する札幌大谷はプリンスリーグで試行錯誤しながら選手権に照準を合わせてチームづくりを進めてきている。選手権では全国に出場したいという目標を持っている。また、攻撃に魅力があるチームであり、その攻撃を最大限生かして、1点勝負ではなく2点、3点と取ってほしい。

決勝戦は互いに自分たちの持ち味を発揮して戦ってもらいたい。

2 両チームへのインタビュー

＜札幌大谷監督 田部 学 氏＞

これまでのチームづくりとしては、コロナ期間のオンラインで規則正しい生活やトレーニング・コンディションなど、できることをデータ化して基準を明確にして取り組んできた。コロナ明けに成長した姿で再会しようということを合言葉に取り組んだ結果、全体的には良いコンディションを保っていた選手が多かった。

プリンスリーグでチームのベースとなる部分を積み上げてきたが、つながる期間が3ヶ月短かったので攻撃の連携・種類が少なかったというのは事実。選手権では相手に対応してどう戦うかということを1試合ずつ積み上げてきた。今大会では全体的に厚い守備ブロックを作って対応してくるチームとの対戦が

HKFA TSG member

坪川 将洋（HKFA TSG）

新木 啓（HKFA TSG）

山口 浩司（HKFA TSG）

太田浩司（HKFA U-12）

寺島 徹（HKFA U-14）

塚田 泰成（HKFA U-16）

舟田 彩一郎（HKFA GK）

小林 俊也（HKFA一貫指導）

岡田 慎司（HKFA U-16）

ベスト8 出場チーム

札幌大谷高校

駒大苫小牧高校

北海高校

とわの森三愛高校

帯広北高等学校

旭川実業高校

東海大札幌高等学校

大谷室蘭高等学校



多かったので、攻撃の部分をいかに機能させるかというところを考えながら戦ってきた。旭川実業は力のあるチームなので、攻撃だけではなく守備も両方しっかりやらなければいけないと感じている。そのために、メンバーも工夫しながら特徴のある選手をピッチに送り出して対応していく。

＜旭川実業高校 富居 徹雄 氏＞

ここまでの戦いを振り返り、決勝戦はある程度照準にきてきている。決勝戦までの試合の中で、チームの一つのチャレンジのしどころ、表現のしどころがあった。またここ(全道大会・決勝戦)で経験していくにしたがって、もう少しベースアップしていければと考えている。

決勝戦については相手（札幌大谷）も技術的にも戦術的にもしっかりしているチームなので、取りどころ(奪いどころ)をどうするかとか、そういうところははっきりしていかなければならないと考えている。

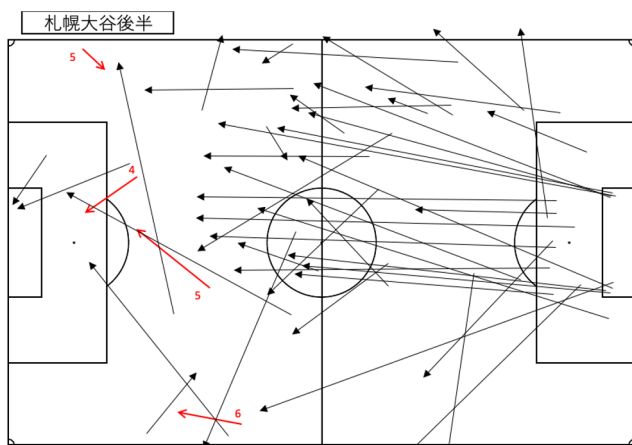
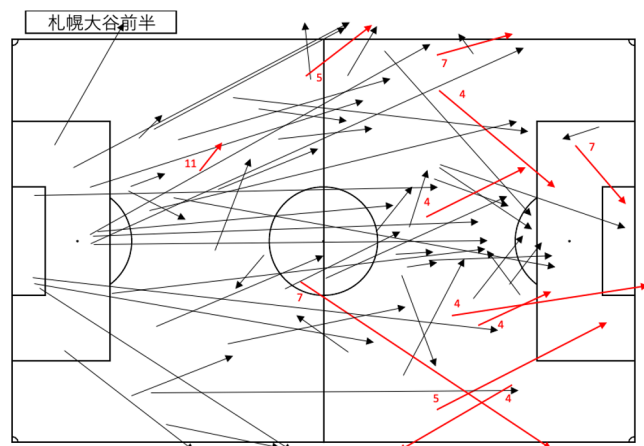
3 ポゼッション

決勝戦を通じての両チームのポゼッションの成功数（パス4本以上の成功でポゼッション成功とみなす）は以下の通りとなり、両チーム互角の様子が見られた。

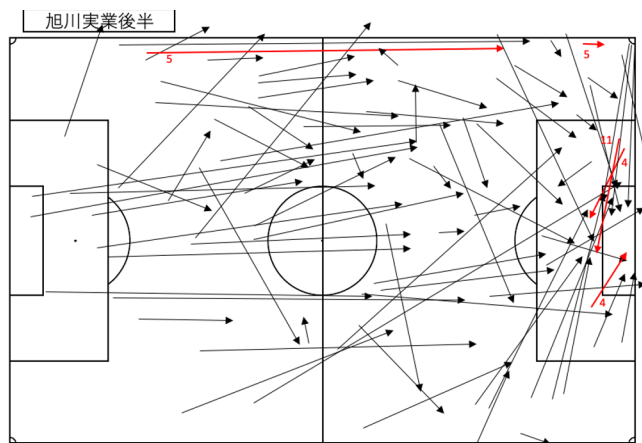
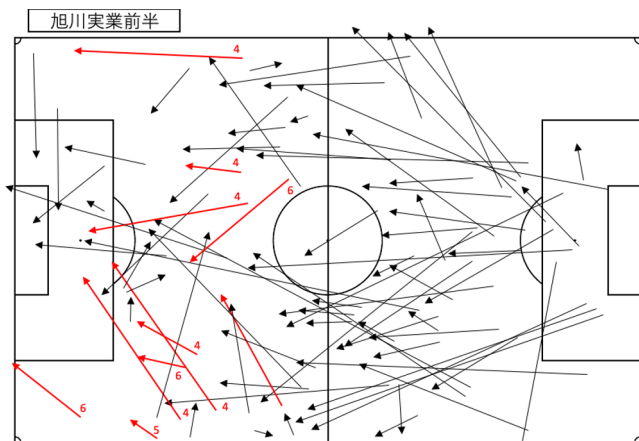
	前半 (時間帯)				前半 計	後半 (時間帯)				後半 計	試合 合計
	10	20	30	40		10	20	30	40		
札幌大谷	0	2	7	2	11	1	2	1	1	5	16
旭川実業	4	3	2	2	11	0	2	3	0	5	16

【札幌大谷】

札幌大谷は試合の立ち上がりはリスクを最小限に抑え、シンプルに相手の背後を狙う戦術を取っていたことがうかがえる。ゲームが落ち着いて、前半の20分以降からは自分たちでボールを保持しながら主導権を握ろうという意図は感じられた。



ただ、ポゼッションしていても早めに前線に配球する戦術を多用していたため、スルーパスやアーリークロス気味に入ったボールを相手に跳ね返されてた様子わかる。また、後半はシンプルに背後を狙う戦術がより色濃く表れ、得点後はリスクを回避するためにポゼッションは減少し、前半の半分程度の成功数となっている。



ゲーム中に失敗したパスの軌跡を矢印で表している。4本以上のパスが成功した（ポゼッション成功）後に失った場合は、赤い矢印で示している。

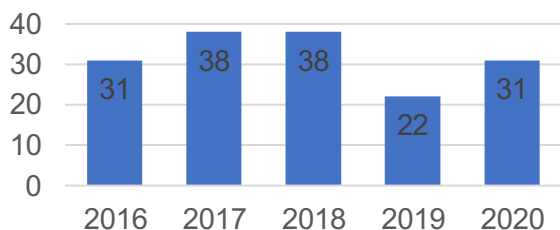
【旭川実業】

旭川実業は試合開始直後から自分たちでボールを保持し、主導権を握る戦術で戦っていた。試合後の大谷高校田部監督のコメントにもあるように、左サイドを起点としてゴール前に配球していた。札幌大谷に比べると、早い段階で背後をねらうというよりも、一度中央

にボールをつけてから、選手たちのアイデアで崩しにかかるような意図が感じられる。

後半は一転してシンプルに背後を狙うサッカーになっていったが、ボールを保持してゴールに迫る回数が増えていたことがわかる。また、質の高いクロスが何度も供給されていたが、ゴールには結びつかなかった。

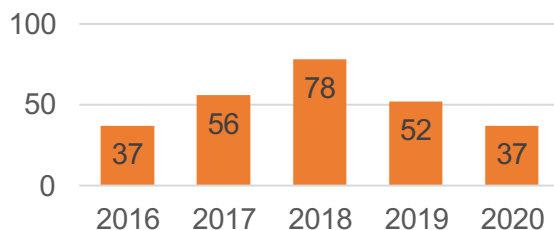
ポゼッション



■ ポゼッション(回数)

(目標の目安～10分間で5回成功)

スローイン



■ スローイン(%)

(スローイン後、パス1回成功でカウント)

昨年度と比較するとポゼッションの成功数は向上しているが、過去5年間の中では高い水準であるとは言い難い。決勝戦ということもあり、シンプルに相手の背後をねらうロングフィードでボールを失う傾向が強かった。コロナの関係でチーム練習が2ヶ月遅れてスタートしているということが影響している可能性もある。また、スローインの成功率が低下しているが、今大会では戦術の一つとしてロングスローを採用するチームが多かった。特に札幌大谷は積極的に利用していた。ロングスローの有効性について検証できるデータの取得方法についても検討していきたい。

4 成果

【前線からの守備】

旭川実業の前線の守備は適切なポジショニングから予測をもとに連動した守備が繰り返されおり、札幌大谷のビルドアップを阻止していた。相手がボールをプレーできる状況ではアプローチのスピードをコントロールし、粘り強く対応している場面が多く見られた。さらには、局面においては決勝戦らしくお互いのプライドをかけて厳しい球際の攻防が見られた。このような攻防がどの場面でも見られるようなサッカーに成長していくことを期待したい。

【効果的なロングスロー】

今大会における特徴的な戦術ともいえるが、多くのチームでロングスローを効果的に利用していた。特に、ゴール前でのプレーは得点の機会を生み出していた。

【クロスの質とその対応】

後半終了間際には旭川実業が何度も質の良いクロスを提供し、大きなチャンスを出していた。それに対して札幌大谷はGKを含めて適切な対応をし、確実に跳ね返っていた。また、ゴール前では体を張り、全力でゴールを守る姿勢が強く感じられた。

5 課題

【浮き玉に対する対応】

試合当日の強い風にも影響されたところはあるが、適切な浮き玉の処理は北海道の選手の課題として挙げられる。落下地点を適切に見極めてボールを後ろにそらさない、跳ね返すのか、パスにするのかの判断を含めて改善を図りたいところである。

【ビルドアップ】

決勝戦ということもあり、両チームともリスクを避けたシンプルな攻撃が多く見られた。しかし、相手の状況を見て下からつないで組み立てていくという判断もできる選手を育てていきたい。ビルドアップに挑戦したが、コントロールやパスの質が低く失敗に終わった場面も見られたので、個人のテクニックの質を高めることにも取り組んでいく必要がある。



6 GKのプレー

成果

- ・ ボールに対してプレーする前に、相手やボール状況などを観ている。
- ・ ゴールを守るための動きやすい姿勢が取れていて、シュートに対して構えるタイミングも良い。
- ・ シュートやクロスに対して、ボールをキャッチするかはじくかの判断ができています。

課題

- ・ プレー強度がある中での守備。
- ・ 効果的な攻撃参加。

まとめ

GKが攻守において主導権を持つために、守備面においては良い準備、攻撃面においては効果的な攻撃参加についてまとめた。

両GKとも1試合を通して、観ること、予測すること続けることで高い集中力を維持し、ピッチ全体へ関わりを持つことができていた。特に攻守の切り替え時はリスク管理に努め、自らの準備はもちろん、味方へのコーチングそしてDFライン裏へのフィードに対して積極的なプレーが見られた。また、自陣ゴール前について、クロスの攻撃に対して、サイドへのパスやサイドでの攻防中にゴール前を観ることで、ボール状況とゴール前の状況を分析し、予測のもとポジションを修正し、落下地点に対し適切な動きだしができていた。シュートに対してもリラックスした動きやすい姿勢から構え、確実にシュートストップにつながられていた。一方、相手のプレースピードが速い時や自陣でボールを失った際の守備については課題が見られた。状況把握に欠け、できていた準備ができないことで、クロスの対応、ゴールを守ることができていなかった。

GKの総プレーに占める攻撃のプレーの割合は65%であり、1試合を通して守備よりも攻撃の機会の方が多いことが分かる。しかし、GKの攻撃参加成功率は12.6%であり、GKから始まる攻撃の約90%はボールを失っているということである。特にGKがボールをキャッチした後、ボールを転がしてからキックは一度も成功せず、サイドボレーキックやゴールキック、フリーキックの成功率は約10%とデータから読み取ることができた。より相手の状況を把握し、GKと味方が関わりながらボールを失わずに攻撃する場面を増したい。例えば、ゴールキックの再開について、チームとして各選手のポジショニングや役割などを共有したうえで試合に臨むこともできるのではないだろうか。

7 両チームへのインタビュー（試合後）

＜札幌大谷監督 田部 学 氏＞

今日は相手の方が力が上だと分析しており、相手の土俵でどれくらいやりあえるかと考えていた。選手が非常に良く頑張り、想定以上にやりあうことが出来ていた。旭川実業の左サイドが良い起点になっていたの、そこに対応しながらどのように自チームの良さを出そうかと考えて戦った。後半は両チームとも選手交代などで変化を生み出していた。

素晴らしいゴールで得点を上げることは出来たが、もっと落ち着いた試合運びをしたかった。今シーズンは選手たちにとって初めての大きな舞台ということも影響したと思う。この経験が全国にも生きてくると思うし、これからは特に攻撃のクオリティーを上げていきたい。

＜旭川実業高校 富居 徹雄 氏＞

今日の試合を振り返り、札幌大谷に頑張られたという印象。うちも(相手に)合わせてしまい、長いボールとかが増えてしまったので、もっと下で繋がなければならないところが、長いボールが多くなってしまったので、そこが敗因だと思う。

今後に向けて下でしっかりつないでいくというトレーニングをもっとしてこなければいけなかったかなと思うので、そこをこれからさらに取り組みたい。

8 まとめ

歴史のある本大会が年々レベルアップしている背景には、リーグ戦文化の醸成があり、そして、特徴のあるチームが上位に進出する傾向が見られるようになってきた。

最後に、2種委員長の荒忍様をはじめ、2種委員会及び出場チーム指導者の皆様、高体連サッカー専門部、札幌地区サッカー協会、そしてHKFA/TSGの活動にご協力頂きました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

